白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部　最優秀賞

「大好きなじじへ」

松任小学校五年　宮岡（みやおか）　咲奈（さな）

私が最近で一番心に残っている事は、じじが亡くなってしまったことです。

私がまだ一年生ぐらいのころ、じじは家族みんなで仲良くくらしていました。私はその時スイミングを習っていて、いつも「スイミング行ってくるね」と言うと、じじは「がんばってきてな」と言ってくれて、それが支えになりがんばろうという気持ちでむかっていました。スイミングから帰ってきて私がドタバタとはしゃいでいると、じじはいつもしんけんな顔で力強く「こりゃー！」とおこっていました。でもその言葉は私にとって落ち着く言葉でした。

スイミングのテストの日には「合かくしたー！」と言うと、じじは笑顔で「すごいな」と、いっぱいほめてくれました。合かくできなかった日だって「またがんばってな」とはげましてくれました。

他にも、じじがおべんとうを食べている時、私はいつもじじのとなりにすわって、おべんとうを食べ進めるのをきらっきらな目で笑みをうかべながら見ていたのをおぼえています。今思うと、なんでだろう？と思うけど、多分じじのもぐもぐと食べている音が自分にとって心地よい音だったからだと思います。その音は今でもきおくに残っています。

食べたあと、いつもじじは同じ場所の木でできているイスにすわってテレビですもうをずっと見ていました。

そんな日々が続いていたある日、その日はお父さんとお母さんが買い物に行っていて、私とばばとお兄ちゃんが家にいました。三人でくつろいでいる時に、ばばが外をながめると、散歩に行っていたじじが家の庭の近くで転んでたおれているのを見つけました。びっくりして私たちはすぐに助けに行きました。私は力がなくて運べなかったけれど、代わりにばばとお兄ちゃん二人で協力して無事助けることができました。

じじが前にも何回か転んでいたのを見たので心配しながら様子を見ていました。

そのあと、お父さんとお母さんが電話で聞いて急いで帰ってきました。お母さんがじじを車に乗せて病院へ向かったのだけど、私は留守番していたのでひやひやしながら帰ってくるのを待っていました。しばらくして帰ってきて、こっせつや頭などは打っていなくて大丈夫だったみたいなので安心しました。でも、あの時私も助けたかったなと後悔しました。

それからも何度か転んだりして足こしも弱くなり、病気もしたのでしせつへ行く事になりました。

しせつに入ってからは、よく家族みんなでじじの顔を見に行って、色んな事をお話ししたりしました。

ある日の夜、しせつから電話がかかってきました。話をきくと「じじがあぶないから病院に運ぶ」と言っていて家族全員大あせりしました。お父さんは仕事だったので、とりあえずばばとお母さんが病院へとかけこんで行き、その間はお兄ちゃんと私二人で家で待っていました。

夜中に一度ばばとお母さんが帰ってきたけれど、朝早くにまた病院に向かったみたいで、私が起きて、家にいたお父さんにじじがどうだったかきくとお父さんは、「じじが亡くなった」と言いました。

その時一番に思いうかべたのは、じじが亡くなる少し前の日にしせつに会いに行っていて、その帰りに私が「また来るね」と言って、じじと強くあく手したことを。ものすごくあたたかくて安心するさわり心地でした。「なかなかしせつに行けなくてごめんね」となみだをうかべながら思っていたのをおぼえています。

数日後、家族としんせきでおそう式をしました。泣きすぎるとはずかしいなと思い、できるだけ泣かないようにしようとこらえながら無事終える事ができました。火そうをした時も、家におこつといえいを置いた時も泣くことはありませんでした。

今もいえいが置いてあります。私はいえいの置いてある部屋に行った時は、いつも小さい声で「来世もまた会おうね。絶対にね。」と言ったりしています。きっとじじはその事分かってくれているはずだと思います。

今、じじは見てますか。私、絶対大人になってもずっとずっとじじの事大好きでいるね。また、「こりゃー！」って声聞かせてね。

